

「身じまい」のおと



◎若林健次

滝野隆浩
社会部編集委員

お墓の話をおちろこちろで聞きながら、私は「先祖とはなんだろう」と考えるようになった。亡くなった父は酔つと「へ、うちの先祖は××藩の家老だ」と言った。本当かどうか分からないうし、調べてみようともしらない。歴史は常に、誰かの都合で書き換えられる。

いまこの世に私がいるのだから、祖先は間違いない。大事にしないと。ただ具体的にイメージできるのは祖父母と、その上の曾祖父母くらいまで。墓参りのとき、祖母と父にそれぞれ語りかけている自分がいる。ご先祖様はその向こうに、うすほんやりといらっしゃる。

最近、甲う形態としていざん認知が進んだ散骨についても考える。「遺骨はまいてほしい」という人と話すと、あまり祖先がどうこうという意識はないようだ。「自分の後始末くらい自分で決めなきゃ」と言われているようでもある。さっぱりした散骨志向の人に、私は魅力を感じたりもする。全国石製品協同組合の意識調査(14年2月)によると、お墓を持たないと答えた人の16・6%は「散骨を検討」しているそうだ。特に40歳代の女性に限ると、「永代供養墓を検討」より多い。

散骨は、まかれた海や山林の周辺住民が違和感を持つ場合も

「散骨専用の島」もある

多い。節度を持ってやる必要がある。ところが、地元が散骨を進んで受け入れている島があるという。

島根県隠岐郡海士町にある無人島・カズラ島。海士町といえば「島をまるごとブランド化」などの施策がウケて、若い世代の移住者が多くなったことで有名なまちだ。地元出身者が東京の葬祭場に勤めていたことがきっかけとなって、周囲200坪の島が08年、「全国初の散骨専用の島」となった。同町も協賛。仮設の棧橋を設置し、毎年5、9月に見学会と散骨が行われる。「国立公園内にあるので、環境は静かで美しいまま残ります」と運営する株式会社カズラの担当者。ただ、どうだろう。近くの港からフェリーで2時間半は、さすがに遠い。費用も26万円(島外者・自ら散骨するタイプ)ほどかかるのに、すでに77人が散骨を済ませ、生前予約も約70件あるという。

お墓の機能として、聖徳大学の長江曜子教授(81)は▽家族や先祖の供養▽骨の置き場▽故人の記録・記念——の三つを挙げた。供養も大事だし、しっかり自分で置き場を考える散骨もいい。でも、私はやっぱり、記録性にこだわりたい。最近、無性に、がんで亡くなった先輩の墓参りをしたいと思う。あるいは好きな作家の墓を訪ねたい。そこで「対話」する。同県・津和野の森鷗外の墓も、鎌倉の開高健の墓にも行った。その昔、私はブンガク青年だった。

「それなら、ヨーロッパがいいですよ」と長江先生は言う。フランスなどは墓碑銘の研究が盛んだとか。世界45カ国を回った先生に、「海外お墓事情」の旅に誘われる。